

## ゲーテの「祝福された憧憬」

長谷川 茂 夫

ゲーテの詩作品中、本論の対象となる詩ほど人口に膾炙し、諸々の解釈をなされてきたものは無いであろう。現在では俗化・陳腐化の恐れさえ見えているこの詩を、筆者はもう一度詳しく正確に吟味してみたい。その際に、総ての説明を無用のものとする万能の「神」という言葉を極力排除するつもりである。また、ゲーテが出典としたサーディとハーフィスの詩との異同についても触れるつもりはない。この詩は完全にゲーテ独自のものと成りえているからである。

本論の読者が予めこの詩を知っていることを筆者は期待する。それゆえ、まず全体を挙げ、そして説明の都度各々の詩句をもう一度挙げることにする。

### SELIGE SEHNSUCHT

Sagt es niemand, nur den Weisen,  
Weil die Menge gleich verhöhnet,  
Das Lebend'ge will ich preisen,  
Das nach Flammentod sich sehnet.

In der Liebesnächte Kühlung,  
Die dich zeugte, wo du zeugtest,  
Überfällt dich fremde Fühlung,  
Wenn die stille Kerze leuchtet.

Nicht mehr bleibest du umfassen  
In der Finsternis Beschattung,  
Und dich reißet neu Verlangen

ゲーテの「祝福された憧憬」

Auf zu höherer Begattung.

Keine Ferne macht dich schwierig,

Kommst geflogen und gebannt,

Und zuletzt, des Lichts begierig,

Bist du, Schmetterling, verbrannt.

Und so lang du das nicht hast,

Dieses: Stirb und werde!

Bist du nur ein trüber Gast

Auf der dunklen Erde.

第一行は語りかけで始まる。

Sagt es niemand, nur den Weisen,

(思慮のある者達以外には、誰にも言ってはならない。)

これは誰に対して語りかけているのであろうか。読者は、自分に向かってだ、と受けとってよい。Sagt は複数に対する命令であるが、ゲーテは、西東詩集が初めて連作の体裁を整えたヴィースパーダー・レジスターで、一般的な語りかけに ihr を使った詩を併置しており、本編もその一つだからである。<sup>1)</sup> また読者は、次のような情景を思い浮かべるのも自由である。それは、死の床に就いた神秘家が枕元に弟子達を集め、今まさに最高の教義を説かんとし、その教理を更に語り承ぐ相手を選べ、と論している姿、即ち、「古代ペルシャ信仰の遺言」と同じ状況である。<sup>2)</sup> この場合でも読者は自分を弟子の一人と考えてよい。いずれにせよ、この行で始まる第一節全体が上述の対象に向かって語りかけられており、第二節以下の呼びかけの対象である du とは実質を異にしている。この問題は本論の重要な論題の一つであり、詩の第二節を論ずるに際して、もう一度詳述される。

Weil die Menge gleich verhöhnet,

Menge は明らかに否定的意味合いで使われている。『タッソー』の「衆愚は

芸術家を困惑させ、臆させる」<sup>3)</sup> という見解と同一であり、『詩と真実』第十三章に述べられた、『ヴェールター』出版時に於ける一般大衆の無理解とも言える反応を連想すれば、ゲーテの意を汲みとったことになるだろう。そして次の箴言が、第一・二行全体の伝達内容を良く説明している。「私がちゃんと承知していることは、私だけが心得ていることなのだ。口に出された言葉は、めったに助けにならない。大抵は、異論、停滞、行き詰まりをひき起こす。」<sup>4)</sup>

Das Lebend'ge will ich preisen,

この中性名詞 *das Lebendige* とは何を指すのだろうか。この時点では一先ず、生きている万物と考えておく以外にない。しかし、それには、

Das nach Flammentod sich sehnet:

という条件が付いている。この行の *Flammentod* は、*Flammenschein* に換えて置かれた言葉である。<sup>5)</sup> この変更に関してシュラーダーは、*Flammentod* はより正確な表現だ、何故なら *Flammenschein* は単に目的への指標にすぎないから、と言っている。<sup>6)</sup> しかし、この変更の本質を言い表わすにはそれだけでは足りず、またこの指摘は、既に詩全体を熟知している者の懐く考察であって、結果から原因を説明するが如き違反を犯している。この第四行がこの時点で及ぼす効果と働きは、今のところ第三行との関連のみで考察すべきなのである。そして、シュラーダーの犯した違反は、次のような誤解が *Flammenschein* という語によって成立する危険を看過する結果を生んだ。即ち、(生物が)「輝く炎」へと惹かれるのならば、それは正常であり、燃え立つ生命への志向とさえも了解できる。そして、それは別に衆愚に知らせてならない程の神秘ではありえないのである。*Flammentod* という造語を採用することでゲーテはこの危険を取り除いたばかりか、語自体の異様さと「炎の死をあこがれ求める」という表現の唐突さで読者に強い衝撃を与え、前行の *das Lebend'ge* をさらに強く印象づけることに成功している。そして未だ詳らかでないこの「生きているもの」の本質を説き明かすことが、次の第二節以下の主目的なのである。

In der Liebesnächte Kühlung,

Die dich zeugte, wo du zeugtest,

第二節第二行の dich と du は読者ではありえない。第一節第一行に関して述べたように、読者に対しては ihr が使われているからである。また、ゲーテの単なる不注意によって ihr から du への移行が起ったという考えは完全に排除すべきである。もし ihr=読者に対して呼びかけたままならば、二行下の leuchtet に対応して zeugtet と合致する韻を、この詩全体で唯一箇所破ってまで zeugtest とした意味が無くなってしまふ。ヴェルナー・クラフトが不審の念を表明した、このミスライムは、極めて意図的なものである。<sup>7)</sup>

では、ゲーテがこのような非常手段を取ってまで、第一節の呼びかけの対象と混同されることを避けようとした du が指すものは、一体何であろうか。第四節第四行をここで挙げることは、何ら解答にならない。この時点での du は、未だそこまで発展していないからだ。詩の発展に従って、この du は発展・成長してゆく。何なのか。往々にして最も単純で簡単なものが正しい解答であるものだが、この場合もそうである。即ち、ここでの du は das Lebend'ge と見るのが良い。何故か。根拠は第一節第三行にある preisen という動詞である。話し手は「生きているものをほめたたえるつもりだ」と言う。しかし、そのために彼は何をするのか。称えるのは単に彼の心の中でだけなのだろうか。そうではなく、彼は実際に Preisgesang を歌っており、詩の第二節からは内容が第一節とは截然と分かれたれ、彼が歌った頌歌そのものが始まっている、と判断すべきなのである。<sup>8)</sup> 語り手が聞き手にではなく、自分の話に出てくる相手に対して du で呼びかけることは、何ら特殊な用法ではない。

それでは、この見解に立ったうえで、各行の具体的な内容を考察してゆこう。

第二節第一行の Kühlung は、様々に論議されて来た言葉だが、大別すると二つの意見に分かれる、そのひとつは、肉体的な欲望を静めた後の（または静めつつある）状態を指す、とする立場である。例をいくつか挙げよう。

「自然な愛の欲求を静めること」<sup>9)</sup>

「たった今、生殖であった夜の愛が冷める」<sup>10)</sup>

「抱擁…(略)…Kühlung…(略)…覚醒」<sup>11)</sup>

そしてもう一方が、「地上的愛の夜のすずしい闇」<sup>12)</sup> に代表される立場である。これは、シラーが「殆どの人間の現存在がそれに掛かっている」と登場人物に言わさしめた「昼の暑さ」<sup>13)</sup> から解き放たれ、欲望が盛んになる時刻を意味する。この二者は、前者を生殖行為そのもの、後者を性的欲望、と簡単な言葉に言い換えても、それほどの外れにはならないであろう。すると次行の「お前を生み出し、お前が生み出した」という規定を満足させるには、一見前者の方が適切であるかのように見える。しかし、この詩全体を貫いている駆動力がエロスの力であることを考えると、未だ充足させられていない性的欲望を想定する方が、より妥当なのである。そしてこの見解は、次行の *zeugen* が過去形を取っている事実とも、良く整合する。即ち、その欲望は、かつては肉体的生殖行為へと駆り立てていたものなのだが、今やそれが別のものへと変質するのだ。その一瞬を第三行は、

Überfällt dich fremde Föhlung,

と表現する。「お前」を襲う「奇妙な感じ」。この *fremd* の内実は何であろうか。コルフは「何か新しいものの予感——或る新しい理想の幻影」<sup>14)</sup> と言い、シュタイガーは「生命を超えた切望」<sup>15)</sup> と言っている。今までに経験したことのない、全く目新しいものであるには違いないが、それだけではゲーテが *neu* に替えて *fremd* を置いた必然性がない。<sup>16)</sup> ここでは、ゲーテの用語法において *fremd* の持つ特殊な意味を読みとるべきである。即ちそれは、*eigen* に対立して、本来の自己とは異質の非生産的な要素を含むものなのである。例えば『マイスター』ではその理念が根底を流れていると言って良く、次の個所はその好例をなすだろう。

Ein Kind, ein junger Mensch, die auf ihrem eigenen Wege irgehen,  
sind mir lieber als manche, die auf fremdem Wege recht wandeln...<sup>17)</sup>

最も不幸な場合には、本来の自己を失ってしまう虞れさえも暗示する言葉なのだ。このように異常な状態に「お前」を陥れる契機が、次行の *stille Kerze* である。

Wenn die stille Kerze leuchtet.

このイメージこそ、一編の詩の中心であり、出発点である。全くの闇のなかで、ただそれだけが存在する静かな光——静かとは、動かないこと、音を立てないこと、である——この光景には、あらゆる人間の、それぞれの憧憬を喚起する力がある。ホーフマンスタールが、そこからクリスティアーネの通夜の晩を連想したのも無理からぬことである。<sup>18)</sup> 自分の内部に眼を向けて、心を闇で満たし、その中心に静かに光を放つ蠟燭を置いてみよう。そうすれば、この詩の次の二節は自ずから湧き出てくると思える程必然的なものであることが理解できる。

Nicht mehr bleibest du umfangen

In der Finsternis Beschattung,

第三節第二行「闇の翳りの裡に」とは外部の夜を指すのではなく、心の中の闇を意味する。

Und dich reißet neu Verlangen

Auf zu höherer Begattung.

この Verlangen は、第二節第一行の der Liebesnächte Kühlung で昂まった、以前ならば性的であるべき欲望なのだが、既に第二節第三行の時点で変質している。この変質した欲望が「お前」にとって見知らぬものであるが故に neu なのである。第一・二行と第三・四行を結ぶ und は、時間的前後関係や因果関係を表わすのではなく、同一の実質を異なった側面から言い表わしていることを示している。Verlangen が変質したものであるのならば、その対象も変質していて当然であり、その特質は höher と呼ばれる。そして Verlangen が性的欲望をその原型として持っているからには、その対象が Begattung と名付けられてしかるべきである。この「より高き婚（くながい）」を実現するために「お前」のおこした行動が、その激しさに相応しく、第四節で一気に歌われている。

Keine Ferne macht dich schwierig,

Kommst geflogen und gebannt,

Und zuletzt, des Lichts begierig,

Bist du, Schmetterling, verbrannt.

既に何度か述べたように、これはすべて精神的次元での出来事であり、この Ferne も空間的距離を表わすのではない。「お前」は、精神の内奥で揺らめかず音も立てず燃えている 蠟燭へ向かって、怯まず、憑かれたように飛んでくる。そしてついには、光に対する熾烈な希求ゆえに、内部の精髓と合体し、自らも光を発しつつ、自分を焼却するのだ。

これまで単に du として呼びかけられて来た das Lebend'ge が、ここで初めて Schmetterling という名で呼ばれた。光を求めて飛ぶ魂にその称号は相応しい。<sup>20)</sup> しかし、この名によって du=das Lebend'ge の正体があきらかになったわけではない。その本質は、既に第二節からの経過のうちに与えられた諸規定によって徐々に明確化されて来ていたのであって、それが verbrannt という一語によって「より高い婚い」を果たし、「炎の死」を果たし、das Lebend'ge としての自己実現を完成しようとしたその刹那に、最もそれに相応しい名前が与えられたわけなのだ。即ち、第四節第四行によって、本質と名称が同時に与えられたのであり、最高の称賛とも呪文とも言えるこの一句によって、第二節から続いてきた頌歌が締め括られているのである。

以上の第二節から第四節を通じて、エロスが秘儀達成の原動力として想定されていることは、ユング派の心理分析理論を連想させる。<sup>21)</sup> 即ち、Kerze が精神の中核をなす自我であるならば、意識層と無意識層の仲介を成すものは、男性においては彼の内的女性部分であるアニマであり、女性においては彼女の内的男性部分であるアニムスであるゆえ、意識と無意識の融和による新しい自己の確立は、異性的なるもの同志の「結婚・交媾」と呼ばれうる。ユング派の人々は、この象徴が古今東西の伝承の至るところで用いられている、と主張している。また、この論に従えば Begattung に付加された höher という規定も自然と理解されるだろう。

Und so lang du das nicht hast,

Dieses: Stirb und werde!

Bist du nur ein trüber Gast

Auf der dunklen Erde.

大いなる昂揚のうちに幕を閉じた第四節の後に置かれたこの節は、一見蛇足のように見える。韻律的にも他節と異なる第五節を、後からの付け加えだろうとブルダッハが推測したのも無理はない。しかし、この節には初めからここに置かれていてよい必然性がある。まず形式的には、この節が第一節とともに、頌歌である第二・三・四節を囲む枠を構成していることである。だが、枠とは言え、第五節が第一節と内容的に一貫した対照を示しているわけではない。詩の出発点である第一節と、そこに至るまでの発展を経て来た最終節とが同じであっては、かえっておかしいのである。例えば、第五節での du は、それまでの総ての節で語りかけた相手を統合したものと考えざるをえない。何故ならば、du の同一性を信じて、この第五節が依然として頌歌の一部と考えるには、so lang という条件付きの物言いが、それまでの決定的語調に比して、いかにも preisen という行為に相応しくない。即ち、第四節から第五節への移行を経て、du もまた飛躍的な発展を示し、読者、das Lebend'ge、そして詩人自らをも含むものとなっているのである。そして、頌歌を歌った後に、上述の三者（実際には、これら三者の間にもはや明確な区別は想定しない方が正しい）に向かって、あらためて語りかけることが、この節の内容的な必然なのである。

それでは、その言葉“Stirb und werde!” から、我々はどのような内容を汲み取ればよいのだろうか。万人の関心を惹き、誰でもがそこに自分なりの解答を見出すこの一句に、どの解釈が正しい、と断定を下せるものだろうか。しかし、筆者にとって認めがたい見解も存在する。それは、この“Stirb” が実際の死であってよい、とするシュナイダーのような立場である。<sup>23)</sup> この詩が現代に於いても存在価値を持ち得るためには、この句の意義は完全に現世的でなければならない。そして、この立場こそゲーテ的である、と筆者は信ずる。

本論に於いては、第二節以降の内容は、総べて精神内部の出来事として扱って来た。では、その推論に沿って、ここでも考察してみよう。第四節で「炎の死」の実現を賛美しておきながら、もう一度 „Stirb und werde!” と繰り返した理由のひとつは、上述したように、呼びかけの対象である du が発展したた

めであるが、もうひとつは、「炎の死」が単なる死であってはならない、それは同時に生成でなければならない、と付け加えるためでもある。ここでの und は同一を意味する。今までの存在を抛つことが、取りも直さず新たな存在になること——この過程を多くの解釈者はゲーテのメタモルフォーゼ理論を借りて説明し、<sup>24)</sup> シュタイガーは、それを Verwandlung であると訂正した。<sup>25)</sup> では、その新たなる存在とは、どのような存在であるべきなのか。逆説的に聞かせるが、その存在が如何なるものか、明確である必要はないのである。かえって、その存在へと未だ達していない古い存在にとっては決して理解されていないものでなければならない。何故ならば、今の存在のままで把握可能なものならば、それは現存在の単なる継続に過ぎず、「死」と呼べる程の隔絶性・飛躍性を具備していないからである。詩人自身と言えども、そこには単なる予感しか持っていないであろう。

それでは“Stirb und werde!”を会得していない者に対して告げられる最後の二行が示す状態は、どのようなものであろうか。この全体は、『詩編』第119編・第19行“*Ich bin ein Gast auf Erden.*”<sup>26)</sup>に骨格を借りていると見て差し支えないであろう。そこからまず Gast の意味内容が明らかになる。即ち、それは、余所者のことである。では、Gast を規定している trüb は何を意味するのか。トゥルンツが、「色彩論の表象が、ここでは詩的象徴となっている」<sup>27)</sup>と述べているのは正鵠を射ている。ゲーテの色彩論では、trüb は光にも闇にも属さない、丁度その中間の状態を意味しており、<sup>28)</sup> その図式が、そのままこの個所に当て嵌まるからである。一方に Kerze-Licht-Flamme を置き、もう一方に Beschattung-Finsternis-dunkel を置いて考えてみよう。fremde Fühlung によって触発され、neu Verlangen によって駆り立てられて、光への趨勢と憧がれを持ちながら、“Stirb und werde!”という敷居を越えられないばかりに、「不分明な (dunkel)」「暗さ」に留まらざるを得ない、中間の中途半端な状態が trüb なのである。そして、この、両者のどちらにも属さないという、身の置き場の無さが、Gast と呼ばれる身分なのだ。従って trüb は、単に心情的な「悲しい」状態ではなく、いわんや dunkel との無駄な重語ではない。

最後にもう一度、全体を振り返ってみると、詩の中心は、既に述べた如く Kerze なのであり、それによって引き起こされた *neu Verlangen*——「あこがれ」なのである。「炎の死」は確かに究極の手段であり目的であるが、そこへの契機である憧憬の意義を、決して過小評価してはならない。究極的行為に敢えて踏み切れない *ein trüber Gast* といえども、一旦この憧憬を身に感じたからには、その内部に向上への契機を依然として含んでいるのである。それゆえ、この詩の標題は、「炎の死」に重点を置いて解釈される危険のある「自己犠牲」では不都合であり、また、向上を求める総ての動的な要因が既に済んでしまったものと見做されがちな「成就」でも不充分であった。<sup>29)</sup>そして「憧憬」の正当な意義を認めた最終的標題において、それが「祝福された」と呼ばれる所以は、*selig* の持つ *beglückt* という意味合いによるのである。それには何か超越的なものの存在と、その意志が暗示されている。*stille Kerze* として現前し、憧憬を通じて、より高い存在へと我々を導くもの——それを神と呼べば簡単であろう。しかし筆者は、ここでゲーテの言葉を借りて、それを *Geist*、即ち *das Vorwaltende des oberen Leitenden*<sup>30)</sup>と呼びたいのである。

注

- 1) Vgl. Burdach, K.: Zur Entstehungsgeschichte des West-östlichen Divans. Drei Akademievorträge hrsg. von Ernst Grumach. Berlin: Akademie-Verlag 1955, S.139f. 以下 Entstehungsgeschichte. と略す。
- 2) Burdach は、“*Selige Sehnsucht*”と“*Vermächtnis*”が内的関連を持っていると指摘している。Entstehungsgeschichte. S.90
- 3) Torquato Tasso. in: Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. Christian Wegner Verlag 1949 (以下 H.A. と略す) Bd.5.S.85.
- 4) AUS MAKARIENS ARCHIV. H.A. Bd.8. S.476.
- 5) Vgl. Maier, Hans Albert: Goethe West-östlicher Divan. Kritische Ausgabe der Gedichte mit textgeschichtlichem Kommentar. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 1965, Kommentar-Bd. S. 112.
- 6) Schrader, F.O.: “*Selige Sehnsucht*” Ein Bekenntnis zur Seelenwanderung. in: Euphorion 46 (1952). S. 48-58. S. 49.
- 7) Kraft, Werner: “*Selige Sehnsucht*” in: Augenblicke der Dichtung.

München: Kösel Verlag 1964, S. 296.

- 8) 但し、オーデのような形式は取っていない。
- 9) Schneider, W: Goethe: > Selige Sehnsucht < in: Liebe zum deutschen Gedicht. Ein Begleiter für alle Freunde der Lyrik. Freiburg im Breisgau: Verlag Herder 1954, S. 298-309. ここでは; Wege der Forschung Bd. CCLXXXVIII, Interpretationen zum West-östlichen Divan Goethes. hrsg. von Edgar Lohner. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1973, S. 72-83. を使用した。 S. 76.
- 10) Borchardt, R.: Zu Goethes » Selige Sehnsucht« in: Prosa I. Stuttgart: Ernst Keller Verlag 1957, S.473.
- 11) Bahr, E.: Die Ironie im Spätwerk Goethes. "...diese sehr ernsten Scherze...". Berlin: Erich Schmidt Verlag 1972, S. 59. 略は筆者
- 12) Burdach: Goethes Sämtliche Werke. Jubiläums-Ausgabe. hrsg. von Eduard von der Hallen. Stuttgart u. Berlin. 以下 J. A. と略す。 Bd.5 (1905) S. 333.
- 13) Schiller, F. :Schillers Werke. Nationalausgabe. Weimar: 1953 Bd.3 "Die Räuber". S. 95
- 14) Korff, H. A. :Geist der Goethezeit IV. Teil. Leipzig: Koehler & Amelang 1953, S. 477.
- 15) Staiger, E. : Goethe 3. Zürich und Freiburg i. Br. : Atlantis Verlag 1959, S. 36.
- 16) Vgl. Maier : a. a. O.
- 17) "Wilhelm Meisters Lehrjahre 8. Buch 3. Kapitel" H. A. Bd. 7, S. 520.
- 18) Hofmannsthal, H. von : Gesammelte Werke In Einzelausgaben. Frankfurt a. M. : S. Fischer Verlag 1959, Prosa II, S. 95f.
- 19) L. u. W. Grimm : Deutsches Wörterbuch. "schwierig", Sp. 2621f. 以下 Grimm と略す。
- 20) ギリシャ神話のプシュケーが蝶の姿をしている事は、多くの論者によって指摘されている。Vgl. J. A. Bd. 5, S. 335., Schneider : a. a. O., S. 75. usw.
- 21) Vgl. C. G. Jung und Marie-Louise von Franz, Joseph L. Henderson, Jolande Jakobi und Aniela Jaffé : Der Mensch und seine Symbole. Olten und Freiburg i. Br. : Walter-Verlag 1968, S. 177-195. "Die Anima als Frau im Manne" und "Der Animus, der innere Mann in der Frau."
- 22) J. A. Bd. 5, S. 334.
- 23) Schneider : a. a. O., S. 77ff.
- 24) Vgl. Burdach : J. A. Bd. 5, S. 335., Schneider : a. a. O., S. 77., Fritz

ゲーテの「祝福された憧憬」

- Strich : Goethe und die Weltliteratur. Bern : Francké Verlag, zweite, verbesserte und ergänzte Auflage 1957, S. 168., Eduard Spranger: Goethes Weltanschauung. Wiesbaden: Insel Verlag MCMXLIX, S.64 usw.
- 25) Staiger : a. a. O., S. 36ff. メタモルフォーゼは徐々に器官が形成されてゆくが、Verwandlung では、別の存在への危険で突然の移行が遂げられる、としている。
- 26) Grimm : “Gast”. Sp. 1470 による。そこには当該詩の第五節全文の引用もある。本文の引用の箇所は、『旧新約聖書』（日本聖書協会1967）では、「われは世（よ）にある旅客（たびびと）なり」とある。
- 27) H. A. Bd. 2, S. 559
- 28) Vgl. Brief an C. L. F. Schulz, den 7. Sep. 1817
- 29) この詩は、“Buch Sad Gasele I”, “Selbstopfer”, “Vollendung”, “Selige Sehnsucht” の順で改題されている。Vgl. Maier : a. a. O., S. IIIff.
- 30) H. A. Bd.2, S. 165.